

現職と研究活動との両立

平成21年3月修了生 鈴木 亨

1. 3年修了は難しい

連合学校教育学研究科の現在の在籍者は、1年次26名、2年次29名、3年次71名です。この比率は例年とほとんど変わりなく、以前から最終年次にとどまる方が多いのは知っていました。しかし、現実に学位記授与式に出てみると、3年修了者の少なさをあらためて感じました。2009年春の修了者15名中、3年修了者はわずか7名でした。2006年入学時は26名いたのですが。

さて、高校現職での研究活動というと、聞こえはよいですが、その実、授業を何年繰り返してもうまくいかないことがたくさんあります。私は高校で物理を教えています。確かに物理の学習は初学者にとって多くの障壁があるようです。そのことを教師自身があまりきちんと把握できていないのではないかと、ということが研究動機の根底にありました。照れ隠しに、教員生活の「後悔と懺悔」と言うこともしばしばです。その材料は山ほどあります。

そうは言っても現職となると時間との闘いです。教員の仕事は授業だけではありません。06～08年の3年間は学級担任をもちながら、教務部長を担当していました。その他、学会や研究会の編集や庶務の仕事、物理オリンピック関係の仕事など、およそ一般の教員よりも遥かにいろいろなことを抱えていました。

「今年論文を出すのはやめようか」という思いが頭をかすめたこともありましたが、「来年、今より余裕ができる保証はない」というのが最後の判断材料でした。でも、どんなに忙しくても教育に関するものもろもろの活動は皆、どこかでつながっています。忙しさがモチベーションの維持につながったのかも知れません。

学位記授与式に過年度生の方が多かったようですが、4・5年目がそれぞれ3名、6年目の方が2名でしたから、見ようによっては現役が最多です。3年で終えられないと、年数を重ねてもさらに難しい、という厳しい実態があるようです。

2. 査読誌への投稿

査読誌の論文掲載は学位審査の規準にもなりますが、それ以前にまず、書くことによって研究が整理されます。その分野の専門家の審査を受けられるのですから、かりに返却されても前向きに受け止めるべきです。

やみくもに投稿しても仕方がありませんが、学会誌などの審査のサイクルが案外長いことは十分に頭に入れておかなければなりません。年4回発行の季刊誌で

も、発行月の2-3か月前には査読が終わっている必要がありますから、投稿から掲載まで最大半年くらいかかってもおかしくありません。リジェクトされて書き直しとなると、さらに時間がかかります。1、2年次のうちに積極的に投稿する必要があります。

博士課程に入学された方はそれぞれに目標があるでしょうし、あるいは壮大な構想を抱いている方もいるでしょう。その研究がまとまってから、となるというまで経っても執筆できません。そもそもほとんどの論文誌はページ数に制限がありますから、研究全体を網羅するような論文にする必要はなく、ひとつの章をまとめるくらいのつもりでよいでしょう。

私の場合、修了1年前に学会誌（物理教育56-1）に掲載された「誤概念を支える因果スキーマ」は幸運なことに2009年度の日本物理教育学会賞論文部門の受賞となりましたが、学位論文全体から見るとほんの一部です。また、在籍中に物理教育国際会議が日本で開かれ、発表の機会があったことも幸運でした。Proceedingsに初めて英文の論文もしたためましたが、審査は通ったものの、発行されたのは1年以上あとになりました。

論文の投稿以外に、口頭発表もあらゆる機会にすることをお勧めします。学会発表というと敷居が高いかも知れませんが、これも発表準備が研究の整理に役立ちます。学会に限らず、大小の研究会、所属講座のゼミなど、議論することで研究は進むものです。私の場合、学部や修士課程の若い学生と話すことも刺激になりました。

発表の経験と作成したスライドはそのまま財産になります。

3. 総合科学としての教育学

連合学校教育学研究科に在籍する皆さんは、あらゆる分野を背景にする方が集まっているでしょう。ある専門分野について学んでいると、どうしてもその分野特有の考え方や表現の流儀に固まってしまうがちです。教育学はまさに総合科学と言えるでしょう。オリジナリティはあらゆるところに潜んでいます。これまで誰も気づかなかったことを見つけるのは困難かもしれませんが、多くの人が気づいていながら見過ごしていることはたくさんあります。

合同ゼミナールでのポスターセッションやディスカッションが大きな刺激であったことを今でも覚えています。行き詰まったときに、案外、異分野にこそヒント、突破口があると思ってください。